

冬期間の道東沖の海難状況について

今野宗一郎 (釧路海上保安部)

1 例年、冬期に中国東北部からシベリア南部にかけて発生する低気圧は、日本海にでてから急速に発達しつつ北海道周辺を通過する。この間、特に道東海域は数日間亘って西偏りし北西の季節風が卓越し、し烈は荒天に見舞われる。この荒天し寒気によって道東海域にある船舶は転覆や沈没のいわゆる重要な海難が発生する危険が増大する。

その態様と原因の主要なものをあげると、次のとおりである。

1-1 風浪が異常に発達し波高が10メートル以上に及ぶため、船体の動揺が激しく荷崩れ現象を惹起し船体の異常傾斜を誘発し、荷崩れと傾斜が相乗的に作用し、終局的に瞬間的に転覆に至る。

1-2 風浪が船体に激突して飛散するいわゆるしぶきは船体の着氷をもたらす。一旦着氷が開始されると、気象状況によっては累次的着氷現象が起り、急速に氷層が成長する。船は船体の重心が低い所にある程安定しているが、着氷は終始海水に洗われる甲板下では成長しやすく、船体構造物など上の方で急速成長するため、重心が高位に変化し安定性を阻害し急激に転覆する危険が高くなる。

1-3 流氷に関連する海難は冬期における海難のうちで、特異な海難と言える。1個の態様を有する原因から数種の海難が惹起され、しかも結果の災害が悲惨なる可能性が高いからである。荒天から避難した漁船群に流氷が押寄せ破壊沈没、転覆、氷上乗揚横転が起るこゝが十分予想されながら、救助手段が制約され、かつ逃げ場も無く死に至る過程の様相はあわれである。

1-4 荒天による高波浪は、1000トン以下の船舶ではしばしば青波となって船体上に奔入する。船舶は通常積荷の重量によって水面下への沈下量に変化するが、船舶が正常に浮上しているためには、それらの沈下作用力に優越する余剰浮力が必要である。しかし、波浪の奔入が連続し基準値以上の余剰浮力が確保されない場合は沈没の危険性が高くなる。

1-5 荒天時波浪は常時船腹へ衝撃を与えるが、その際に発生する船体の振動により穀物、岩塩、粉炭、鉱石、肥料などの微粒子状貨物は舷側がわへ偏移し、片積み状態を発生させる。これによって起る傾斜は簡単に修正出来ず更に次の傾斜と積荷の横移動を誘起して相乗作用で転覆に至らしめる。

2 荒天下における漁船の操業は、風浪により操船の困難性が増大し、しばしば自船の漁網、他船放棄の浮流網を推進器に纏絡させ航行不能に陥る。船は推進力喪失下では荒天に対する耐航性が劣等するため、横揺れの増大や海水の打込みの危険性が増大する。

3 冬季は荒天による船体動揺と着氷による転倒、海中転落に起因する死亡、負傷事故が多発する蓋然性が高い。海中転落は水温の低下時であるだけに、生存可能時間が短く、また荒天下での発見揚収率が極めて低い。

以上の様相、冬の道東沖は荒天着氷流氷に起因する船舶の危険度が極めて高い。